

武蔵野音楽大学



学芸員課程

年間活動報告書

2022



Annual Report of the Curator Course

Musashino Academia Musicae

April 2022- March 2023

目次

| | |
|-----------------------------|----|
| ■『年間活動報告書』2022 刊行に寄せて | 1 |
| ■学芸員養成課程カリキュラム | 2 |
| ■本学の学芸員資格課程の基本理念と方針 | 3 |
| ■各科目の報告 | 8 |
| 博物館学概論 1 年次前期..... | 8 |
| 生涯学習概論 1 年次後期..... | 9 |
| 博物館情報・メディア論 2 年次前期..... | 10 |
| 博物館展示論 2 年次後期..... | 12 |
| 博物館経営論 2 年次集中..... | 14 |
| 博物館資料論 3 年次前期..... | 16 |
| 博物館資料保存論 3 年次後期 | 18 |
| 博物館教育論 3 年次後期..... | 20 |
| 博物館実習 4 年次通年 | 23 |

■『年間活動報告書』2022 刊行に寄せて

音楽総合学科アートマネジメントコース長（学芸員養成課程専任教員） 中川俊宏

令和4年4月に「博物館法の一部を改正する法律」が公布され、いよいよ本年（令和5年）4月に施行されることとなりました。博物館の定義や目的も見直されるなど、昭和30年(1955年)以来67年振りと言われる大きな改正がなされました。新たに設けられた登録制度では、基準に沿った学芸員の配置が必須の登録条件とされており、条件に満たない施設は「博物館に相当する施設（指定施設）」に指定されることとなりますが、この背後には、指定施設から登録施設を目指す流れを作り出そうとする文化庁の政策的な意図も読み取れるようにと思います。学芸員の配置を促すインセンティブとなるよう期待したいところです。

一方、文化庁次長の発信による「博物館法の一部を改正する法律の公布について（通知）」によりますと、改正「博物館法」は、「文化芸術基本法」の理念と軌を一にするものであり、「まちづくりや国際交流、観光・産業、福祉・教育等の関連機関と連携した文化施設としての役割」を博物館に求めているようです。今や博物館は、従来の役割や機能に加えて、「社会教育施設と文化施設の双方の役割・機能を担う」ことが求められているとされています。当然のことながら「学芸員をはじめとする専門的職員の育成・配置が重要であることを踏まえ、その社会的地位の向上及び雇用の安定等の処遇改善に努めること等により、我が国の博物館の活動の基盤を担う人材の育成・確保に努めるよう配慮すること」が国会審議においても繰り返し求められたとあります。

学芸員養成はますます重要とされる時代に入っています。今年度本学では、4年生17名、3年生16名、2年生17名、1年生16名の計65名の学生が、学芸員課程を履修しました。長引くコロナ禍の中、博物館における実習も工夫して行われてきました。来るべき新年度は、心置きなく実習・演習や見学が行える日常を取り戻し、本学の特色を生かした学芸員養成の一層の充実が図れる年であるよう期待しているところであります。

この『年間活動報告書』は、本学学芸員課程の教育活動の記録として、また自己点検の一環として作成しているものでありますが、今後の本課程の発展に資するものとなるよう心がけていきたいと思っております。関係各位の皆さまには、今後ともよろしくご指導ご助言くださいますようお願い申し上げます。

■学芸員養成課程カリキュラム

博物館に関する科目

| 履修年次 | 期間 | 科目名 | 単位数 | 担当教員 |
|------|----|-------------|-----|-----------|
| 1 | 前期 | 博物館学概論 | 2 | 熊澤 弘 |
| 1 | 後期 | 生涯学習概論 | 2 | 守重信郎 |
| 2 | 前期 | 博物館情報・メディア論 | 2 | 久保仁志 |
| 2 | 後期 | 博物館展示論 | 2 | 久保仁志 |
| 2 | 集中 | 博物館経営論 | 2 | 久保仁志 |
| 3 | 前期 | 博物館資料論 | 2 | 守重信郎・脇谷真弓 |
| 3 | 後期 | 博物館資料保存論 | 2 | 守重信郎・脇谷真弓 |
| 3 | 後期 | 博物館教育論 | 2 | 脇谷真弓 |
| 4 | 通年 | 博物館実習 | 3 | 久保仁志 |

履修指定科目

| 履修年次 | 期間 | 科目名 | 単位数 | 担当教員 |
|------|----|-------------|-----|------|
| 1～4 | 前期 | 文化史 I | 2 | 中川俊宏 |
| 1～4 | 前期 | ヨーロッパの美術史 I | 2 | 熊澤 弘 |

学芸員資格課程とはどのような科目でしょうか。それを武蔵野音楽大学という音楽教育を専門とする大学において学ぶ意義はなんのでしょうか。ここでは、本学の学芸員課程の特色を紹介いたします。

1. 学芸員資格課程とは
2. モノに即した学び
3. 音楽系大学における学芸員資格課程の意義
4. 本学の学芸員資格課程の歴史
5. 本学学芸員資格課程の基本方針
6. 学芸員資格課程の履修モデル
7. 最後に：新型コロナウイルス禍の時代の学芸員資格課程

1. 学芸員資格課程とは

博物館とはどのような場所なのでしょう。文化庁のウェブサイトの記述を引用すれば、博物館とは「資料収集・保存、調査研究、展示、教育普及といった活動を一体的に行う施設であり、実物資料を通じて人々の学習活動を支援する施設」であり、「歴史や科学博物館をはじめ、美術館、動物園、水族館などを含む多種多様な施設」として、日本の社会教育・文化芸術にとって重要な位置を占めています¹。学芸員とは、「博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業を行う「博物館法」に定められた、博物館におかれる専門的職員」とされています²。学芸員課程とは、このような専門職員にふさわしい技能・知見を習得するために開設されたものであり、日本国内の多くの大学で、学芸員認定課程のための科目が開設されています。

ただ、この教育課程で学ぶことのメリットは、実は「博物館で働くためのノウハウを学ぶ」にあるわけではありません。そもそも、この課程を履修したから「学芸員」ある

¹ 文化庁ホームページ「博物館の概要」より

http://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/gaiyo/ * 2022年3月1日閲覧

² 文化庁ホームページ「学芸員について」より

http://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/about/ * 2022年3月1日閲覧

いは「キュレーター」になれるのかと言われれば、それは極めてハードルが高く、高度な専門性と実践経験が必要なこの職業に実際に就いている人は極めて限られている、という現実があります。この科目で私たちが学ぶのは、「博物館という社会教育／文化施設を通じて、どのように文化芸術から学ぶのか」ということにほかなりません。文化芸術を学ぶ上で重要な視点そのものと言える内容です。そしてそれこそが、本学の学芸員課程が核に据える内容と言えます。本学は「音楽芸術の研鑽」を教育方針の一つに据えています。本学の学芸員課程は、その音楽芸術への理解をより一層高めるために、「歴史」「ほかのジャンルの芸術」「文化遺産・文化財」を包括する博物館について学び、芸術文化全体に対する意識を高めるものとなっています。

2. モノに即した学び

学芸員課程のための学問は、「博物館学」(Museology / Museum Studies)と呼ばれています。これは、「ミュージアム」をめぐる様々な領域を包括する学問で、それは文化史・歴史学的、博物学的・考古学的な学問のみならず、政治・経済学的、情報統計学的でもあり、そして教育学的な要素も含まれた、複合的な学問といえます。

このような博物館学を、大学における学芸員課程のなかで学ぶ際には、2つの点が重要になります。一つは、講義を中心とする座学において、文化芸術の複合的な視点から学ぶことであり、もう一つが、博物館や図書館の資料、つまり「実物」に即した学習が重要視される、という点です。2番目の特徴である実物に即した学習を行うためには、実物に多く接し、学ぶことが必須となります。

そのために学芸員課程では、学外で博物館等の施設見学を行うことがしばしば行われます。本学の学芸員課程でも、学芸員課程履修者全体で博物館見学を行う機会を作るほか、各科目において、専門的な内容に即した施設見学を行っております。

それとともに、実物に即した学習で最も重要な点は、大学自体に学ぶための学術資産があるか、という4点になります。実際、学芸員課程を開設する大学にはそれぞれ歴史があり、それらの学術資産として、様々な資料が蓄積されています。そしてそれらの学術資産の使用可能性によって、各々の大学の学芸員課程の「キャラクター」が決まってきます。

武蔵野音楽大学が所蔵する「実物」資料とは、いうまでもなく「楽器ミュージアム」や「図書館」が所蔵する種々の資料のことになります。特に、楽器ミュージアムは、日

本国内で有数の所蔵品件数を誇る音楽資料の博物館であり、それらを活用した授業・実習をすることができることは、音楽芸術に対する理解をより多面的なものとすることができる、という点で、本学の学芸員課程の大きな魅力となっているのです。

「モノ」に即した学問である博物館学の醍醐味が最も発揮されるのは、最終年度に実施される「博物館実習」です。ここでは通常の講義・実習とともに、「館務実習」として、本学の楽器ミュージアムが主たる実習先となっています。学外の施設で実習を行う学生もいるとはいえ、音楽教育に直結する資料をこれだけ多く所蔵する施設がある強みは見逃せません。また、「博物館実習」のみならず、通常の授業のなかでも（例：博物館学概論／博物館資料論／博物館資料保存論／博物館教育論 等）、楽器ミュージアムに協力頂いている点は、本学の学芸員課程のメリットと言えるでしょう。

3. 音楽系大学における学芸員資格課程の意義

本学のような音楽系単科大学のなかで、博物館学講座を開設しているところはさほど多くはありません。そのなかで、「ユニヴァーシティ・ミュージアム」、すなわち大学内の学術資産をまとめた博物館を有しているところは、東京圏内では国立音楽大学と武蔵野音楽大学が挙げられます。本学のような音楽を専門とする単科大学にとって、博物館学を履修可能であるという事実は、以下の点で利点があると言えます。すなわち：

1. 楽器資料を通じて、音楽と、音楽に関連する芸術文化全体を学習することができる。
2. 楽器資料を活用した展示と、教育普及プログラムを展開することができる。

前者は、楽器を単に、音楽史上に残る珍しい資料として取り扱うだけでなく、その楽器資料を出発点として、音楽、ならびに、音楽に関連する文化（芸術史全般、西洋・日本東洋・民俗芸能史、など）を考察する原点とすることを意味します。また、後者については、楽器資料を出発点として、展示されているもの／教育普及プログラムとして提供するものが、「来場者」「鑑賞者」「参加者」にいかなる効果を与えるのか、という点から理解することができるのです。

4. 本学の学芸員資格課程の歴史

以下において、本学の学芸員課程の概要について、簡単に紹介しておきたいと思えます。

本学で学芸員課程が開設されたのは、2007 年度のことです。当時新たな学科として

スタートした音楽環境運営学科（*現在のアートマネジメントコースの前身）で取得できる資格として、音楽環境運営学科生のみが履修できる環境にありました。音楽環境運営学科の当時の学生の大半が学芸員課程を履修することもあって、この課程は、本学の博物館学を指導するとともに、その科目と密接に関連するアートマネジメント教育の一端を担うものと位置づけられていました。

その後、2017年度に江古田の新キャンパスが竣工し、音楽学部が改組され演奏学科、音楽総合学科が開設されたのと時期を同じくして、学芸員課程は音楽環境運営学科のみならず、すべての学部新生が履修することができるようになりました。この課程の変更により、本学の学芸員課程は、アートマネジメント教育の一端を担う、という位置づけから、音楽芸術をより多様に学ぶための科目としてその内容を拡張させています。そして、2020年度からは、この新しい課程で学んだ学生が資格を取得しています。

5. 本学学芸員資格課程の基本方針

本学の博物館学講座全体の基本方針は以下の通りとなります。

1. 博物館学／文化遺産に対する基礎知識を学ぶ（博物館学概論）
2. 博物館という社会教育施設の運営と、その政治性を学ぶ（博物館経営論）
3. 博物館で取り扱う「資料」の概念を学ぶ（博物館資料論／博物館情報メディア論）
4. 社会教育施設としての博物館の、「教育的側面」を学び考察する（生涯学習概論／博物館教育論）
5. 博物館資料としての「楽器」を学ぶ（博物館資料論／博物館資料保存論）
6. 「楽器」「音楽資料」を活用した展示企画を実施する（博物館実習）

上記の内容を達成するために、各科目では、以下のような個別方針が共有されることが望ましいといえます。

1. 座学、実物に触れる学習、博物館・文化施設などの現場での学習を、バランスよく実施する。
2. 学内施設、特に、楽器博物館、図書館の所蔵資料を十全に活用できるプログラムをつくる。
3. 学外施設での学習の機会を、可能な限り確保する。

上記のような基本方針、個別方針を達成するために、それぞれの科目の講師、講義と学外見学のプログラムを構成するとともに、講師同士が連携しながら合同の見学プログ

ラムを実施しております。本学の学芸員資格課程は、学内の豊かな学術資産を活用しつつ、音楽を中心とする文化芸術をより複合的に学ぶためのプログラムとなっております。

6. 学芸員資格課程の履修モデル

学芸員課程においては、文化庁が定める以下の科目・実習を行うことが求められています。2022 年度入学者が履修する場合には、以下のように履修することが推奨されています。なお、主たる科目とともに、教養科目として「ヨーロッパの美術史 I」「文化史 I (半期)」を 3 年次終了時まで履修することが必須となっています。

1 年次：博物館学概論 (半期)、生涯学習概論 (半期)

2 年次：博物館展示論 (半期)、博物館情報・メディア論 (半期)、博物館経営論 (集中)

3 年次：博物館資料論 (半期)、博物館資料保存論 (半期)、博物館教育論 (集中)

4 年次：博物館実習

これらの科目とともに、教養科目から、ヨーロッパの美術史 I (半期)、文化史 I (半期) の履修が必要です。

4 年次に実習の実施が可能になるためには、それ以外の科目の履修が条件となりますので、注意してください。

7. 最後に：新型コロナウイルス禍の時代の学芸員資格課程

最後に、本学の学芸員資格課程と、新型コロナウイルス禍の時代の学びの関係についてまとめておきたいと思います。

2020 年初頭から世界に広まった新型コロナウイルスの影響が広がってから、武蔵野音楽大学では講義系の科目を中心にオンライン化が進み、前年度 (2022 年度) においても、多くの講義はオンラインが維持されています。これとともに、学芸員資格課程は、コロナ禍に対応することが求められています。しかし、学芸員資格課程教育にとって、「モノに触れて学ぶことは、課程の特性上極めて重要であるため、大学の指針に基づいた講義・実習を実施する中で、可能な範囲での対面の教育を実施することを進めています。モノに触れにくい環境のなかで、なおかつモノの存在を考えながら、博物館学を学ぶことを通じて、音楽を中心とした文化芸術を、より多様で豊かに、力強く学んでいただきたいと考えています。

(2023 年 4 月 1 日記)

■各科目の報告

一昨年度から続く新型コロナウイルス感染症は収まらず、学生の中にも感染者が少なくない状況が続く1年であったが、今年度（令和4年度）は、語学・教養科目など一部の科目を除いて、対面授業が許されたため、学芸員養成課程の科目も基本的に対面での実施が可能となった。しかしながら、見学・実習・演習などにおいて本学の優れた教育環境や各教員の工夫を生かすことが難しい点は変わらず、昨年度同様に制約のある1年となった。そのような状況にありながらも、「博物館実習」を少人数制で行うなど、各教員それぞれに知恵を絞り、学修成果に結実させる努力は続けられ、授業回数についても、前期・後期ともに全科目が予定どおり各15回を確保することができた。

以下、コロナ3年目となった各科目の授業の報告である。

（中川）

博物館学概論

1年次前期

担当教員：熊澤 弘

「博物館学概論」は、学部1年次に、学芸員資格課程を学ぶすべての受講生が最初に学ぶ科目で、「博物館とは何か」「文化にとって、市民社会にとって、博物館はどのように機能しているのか」「博物館を通して何を学ぶのか」といった内容を学びます。またこの講義では、学芸員資格課程の基礎となる内容とともに、文化芸術全般の基礎となる「教養」にかかわる内容も含んでいます。具体的には、音楽およびそれに関連付けられる文化芸術にとって、「博物館」という施設・制度がどのような意味を持つのか、という内容も講義の中で扱います。

2022年度の「博物館学概論」はオンラインで実施されました。

授業内容

| | 授業内容〔後期〕 |
|----|--|
| 1 | 生涯学習とは何か―生涯学習の理念 |
| 2 | 生涯学習の提唱とその後の展開―ユネスコ・OECD と生涯学習 |
| 3 | わが国の生涯学習の流れ―各種教育審議会の答申 |
| 4 | 社会教育の理念と社会教育行政 |
| 5 | 社会教育施設①（公民館・生涯学習センター） |
| 6 | 社会教育施設②（図書館・青年の家など） |
| 7 | 社会教育施設③（博物館）・施設見学レポート課題の発表 |
| 8 | 社会教育施設の事例研究 |
| 9 | 生涯学習と高等教育―大学の第 3 の機能と生涯学習 |
| 10 | 生涯学習を保証するシステムとしての大学博物館 |
| 11 | 生涯学習の課題と評価・世界の生涯学習 |
| 12 | 授業内レポート作成 |
| 13 | 生涯学習施設調査プレゼンテーション及び質疑応答①・授業内レポートのフィードバック |
| 14 | 生涯学習施設調査プレゼンテーション及び質疑応答② |
| 15 | 生涯学習施設調査プレゼンテーション及び質疑応答③・全発表のフィードバック |

2022 年度後期の「生涯学習概論」は、久しぶりに教室での対面授業で行うことができた。そのため、プレゼンテーションも可能になり、今年度はシラバス通りの授業内容を実施することができた。学生には「生涯学習施設見学レポート」を提出させ、最終の 3 回の授業で各自にその発表を課した。また、プレゼンテーションの前に「授業内容レポート」を授業内に作成させた。やはり対面での授業は、学生とのコミュニケーションが取れ、オンラインよりも充実した授業になると実感した。

・授業の到達目標及びテーマ

メディアの多様化、それに伴う情報の増大の波は、博物館のあり方自体を変革した。「情報」を構築・整理・管理するメディア技術はアナログからデジタルへと大きく移行しつつある。それに伴い「情報」は変質したのだろうか。どのように「情報」を扱えばよりよい博物館として機能するのだろうか。「メディア」が可能にしているものとは何か。そもそも「情報」とは何か。これらの問題を博物館資料を通し「アーカイヴ」という視点から学ぶ。そして、資料の収集・整理・保管・公開するための基本的な方法論を身に付けることを目標とする。

・授業の概要

様々な新旧メディアの混在によって多様化する諸事象とその表現を、観測・記録・伝達・表現するための方法論の構築を目指す。具体的には資料調査や展覧会の見学を行い、「情報化」の諸様態とメディアの活用方法について考えるための課題を貸し、レポート作成と発表を行ってもらおう。

・授業内容

- 1 はじめに：博物館情報・メディアとは何か
- 2 芸術史を通じたメディア史を学ぶ
- 3 メディア技術史の変遷に伴う情報形体の変遷を学ぶ
- 4 博物館の情報・メディア：ICT時代の博物館情報のあり方
- 5 理論1：博物館資料の情報化とは何か
- 6 理論2：ドキュメンテーションとアーカイヴ
- 7 理論3：アーカイヴという概念
- 8 理論4：デジタル・アーカイヴの現状と課題
- 9 理論5：アーカイヴと芸術
- 10 博物館における情報の発信・受信を考える：情報の管理と公開
- 11 実例研究1：様々なアーカイヴでの情報1（学外見学実習）
- 12 実例研究2：様々なアーカイヴでの情報2（学外見学実習）
- 13 学外見学実習の考察と発表と質疑応答1

14 学外見学実習の考察と発表と質疑応答2

15 総括：博物館における情報とメディアの諸様態について

今年度は、前年度に続き新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、ほぼ全てZoomを用いたリモート講義を行った。例年、講義で主眼を置く「アーカイヴ」の概念に対する理解を深めることを目的として、アーカイヴ機関を訪問し、実際の管理・運営について学んでいた。

本年度は慶應義塾大学アート・スペースで行われた「スタンディング・ポイントIII：ハンネ・ダルボーフェン」³の見学を6月11日に行いその代わりとした。本展示では、主にシリーズで構成された資料的な作品を制作するドイツの作家ハンネ・ダルボーフェンの作品が出品されている。自らの生を得意な形式によって記録し、普遍化を行っている作家である。各自に事前調査を行うための資料を配布し、写真とレポートの提出を求め、



それらを元に、発表及び議論を行った。Google ClassroomとGoogle Formsを利用することによって、課題の提出、講義時間外の質疑応答、参考資料の共有などをスムーズに行うことができた。各回の終わりに講義ノートデータを提出してもらうことで、各学生の理解度や誤解などについて知ることができ、適宜講義内においてそれらについてのフィードバックを行うことが可能になった。

³ <http://www.art-c.keio.ac.jp/news-events/event-archive/hanne-darboven/>

・授業の到達目標及びテーマ

博物館資料「展示」の歴史と意義を学ぶとともに、博物館・美術館での展示活動を題材として「展示」を多角的な視点から学び、専門的知識がどのような「展示」によって鑑賞者へ伝達可能になるのかを考える。またそれだけではなく、「展示」することによってどのような社会・文化的効果を生み出せるのかも考える。それらを通し、最小の展示ならば行える知識と技術を身に付けることが目標である。

・授業の概要

博物館資料の調査・研究の成果を鑑賞者に示すこと、資料を公開し多様な社会的かつ文化的活動に資することを目的とするのが「展示」である。この展示には、博物館およびギャラリーを中心に技術と知見が長く培われてきた。博物館・美術館での展示活動に着目し、展示がどのような効果を持つのか、その「学術性」「政治性」「社会性」について具体的な展覧会を例に考察する。また、自らの身の回りにある品を対象とし、最小規模の展示をシミュレートするワークショップを行う。

・授業内容

- 1 はじめに：博物館展示を考察する意義とは
- 2 博物館・文化財展示の歴史1：古代から近代まで
- 3 博物館・文化財展示の歴史2：近代から現代まで
- 4 展示の意義を考える1：展示の学術性
- 5 展示の意義を考える2：展示の政治性
- 6 展示の意義を考える3：展示の社会性
- 7 博物館展示の実例研究1：様々な展示の形式と展示を作り上げるためのガイドラインを学ぶ
- 8 博物館展示の実例研究2：美術館・博物館の展示実態を学ぶ
- 9 博物館展示のためのワークショップ1：身近な物品の調書作成
- 10 博物館展示のためのワークショップ2：物品解説の発表
- 11 博物館展示の諸問題1：展示品と諸解説（学外見学実習）
- 12 博物館展示の諸問題2：展示と諸印刷物のレイアウト（学外見学実習）

- 13 学外見学実習の考察と発表と質疑応答1
- 14 学外見学実習の考察と発表と質疑応答2
- 15 総括：博物館における展示の意義について

今年度は、前年度に続き新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、Zoomを用いたリモート講義となった。しかし、ギャラリーと美術館も徐々に平常時の開館状態へ近づいているため、各自で美術館見学へ行き、物体と情報をどのようにレイアウトすれば、来場者へより良く伝達可能なのかという問題を中心に展示について学んだ。また、見学した「DOMANI・明日展 2022-23」（国立新美術館 | 2022年11月19日～2023年1月29日）は、日本がどのように美術を支えて来たのかについての一端を知ることができる重要な展覧会であり、同時代の作家たちが何を考えてどのような作品を作っているのかについても学ぶことができた。

また、「大切なものへのパースペクティブ」と題し、自らが大切にしている物の調書を作成するとともに、講義内で簡易的な展示を行い、物の傍らにてプレゼンテーションする課題を行った。身近な物を博物館学的に情報化すること（調書作成）によって、日常では見落としてしまう物の多面性と博物館学的方法の一端を学ぶことができた。

Google ClassroomとGoogle Formsを利用することによって、課題の提出、講義時間外の質疑応答、参考資料の共有などをスムーズに行うことができた。また、各回の終わりに講義ノートデータを提出してもらうことで、各学生の理解度や誤解などについて知ることができ、適宜それらについてのフィードバックを行った。

担当教員：久保仁志

・授業の到達目標及びテーマ

博物館の目的、種類と機能、博物館と市民との関わり、博物館鑑賞者を増やすための方法と手段、意識調査、必要経費と収支について考察する。また、特に美術分野を焦点とし、美術館・ギャラリー・コレクター・批評家・鑑賞者の関係に着目することで博物館経営の現状と問題について理解を深めることを目標とする。

・授業の概要

博物館の経営活動の実際を中心に博物館経営における諸問題について学ぶ。博物館利用者の行動体系、指定管理者制度と公立博物館、企画展と集客増への取り組み、全国の博物館の連携などについて、主に美術分野の展覧会を焦点として学ぶ。また、美術作品がどのような価値の体系をもとに流通しているのかについて、ギャラリー調査を行い、レポート作成と発表を通して考える。

・授業内容

- 1 はじめに：社会教育施設の経営をめぐる諸問題
- 2 博物館経営論史：世界の博物館・日本の博物館の経営
- 3 博物館経営の基礎概念1：組織体系
- 4 博物館経営の基礎概念2：法体系
- 5 博物館経営の基礎概念3：学芸員・職員
- 6 博物館と社会の関係について 地域社会と博物館
- 7 芸術作品の諸価値について
- 8 博物館とギャラリーとコレクター（学外見学実習）
- 9 博物館がマネジメントする諸対象について（学外見学実習）
- 10 博物館と政治・経済（学外見学実習）
- 11 学外見学実習の考察と発表と質疑応答
- 12 総括：博物館経営論における根本的諸問題

今年度は、前年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、全てZoomを用いたリモート講義となった。例年ならば、ギャラリーと美術館を巡り、芸術作品に

付与された諸価値の多様性とそれらが孕む政治経済的な問題を中心に講義を展開していたが、今年には実際に現場へ赴くことが叶わなかった。そのため、主に美術館をテーマにしたドキュメンタリーとフィクションの映画を視聴し、レポート提出を求めた。各学生のレポートの中からいくつかを選び、学生全員に向けてテキスト・データで共有し、リモートでディスカッションを行った。それにより、美術館経営が単に美術館だけで完結しうる問題ではなく、社会の様々な編み目の中で考えるべき問題であることを学ぶとともに、個々人が抱える美術作品の諸価値へのパースペクティブを深めることができた。特に映画《ザ・スクエア 思いやりの聖域》（リューベン・オストルンド監督 | 2018年 | スウェーデン・ドイツ・フランス・デンマーク合作）は、解決が望まれる現代社会の諸問題を美術館のフレームを通して考える作品であり、美術や美術館について考えることが社会的・経済的・政治的な諸問題を考える機会となることも学んだ。

本講義においてGoogle ClassroomとGoogle Formsを利用することによって、課題の提出、講義時間外の質疑応答、参考資料の共有などをスムーズに行った。

授業内容

| | 授業内容〔前期〕 |
|----|--|
| 1 | 博物館資料とは一モノから資料へ（脇谷） |
| 2 | 博物館資料としての楽器—その視点のあり方（守重） |
| 3 | 楽器資料について①鍵盤楽器（守重） |
| 4 | 楽器資料について②弦楽器（守重） |
| 5 | 楽器資料について③木管楽器（守重） |
| 6 | 楽器資料について④金管楽器（守重） |
| 7 | 楽器資料について⑤打楽器（守重） |
| 8 | 楽器資料について⑥日本の楽器（脇谷） |
| 9 | 楽器資料について⑦民族楽器（アジア）（脇谷） |
| 10 | 楽器資料について⑧民族楽器（アジア以外）（脇谷） |
| 11 | 楽器を通して見えるもの（脇谷） |
| 12 | 楽器資料を深く理解するために —楽器以外の資料の重要性（脇谷） |
| 13 | 資料の調査研究発表・質疑応答①（守重・脇谷） |
| 14 | 資料の調査研究発表・質疑応答②（守重・脇谷） |
| 15 | 資料の調査研究発表・質疑応答③・ 全発表のフィードバック（守重・脇谷） |

2022 年度前期は、ようやく対面の授業形式で始まった。以前に戻り、配付資料は授業開始時に学生に配付した。また昨年ではできなかった古楽器教室などの楽器を「実物資料」として参考にすることができた。また、最後のプレゼンテーションも実施でき、シラバス通りの授業を実施することができた。活用した楽器は下記の通りである。

| 回 | 授業内容 | 利用の詳細 | |
|---|-------------------|---------|-----------------|
| 3 | 楽器資料について① 鍵盤楽器 | C409 教室 | チェンバロ |
| 4 | 楽器資料について② | E378 教室 | ペダルハープ・アイリッシュハー |

| | | | |
|--|-----|--|---|
| | 弦楽器 | | プ |
|--|-----|--|---|

(守重)

2年ぶりに対面形式の授業が始まり、また、楽器ミュージアムの公開が始まったことから、楽器ミュージアムを積極的に活用した。活用の詳細は下記の通りである。

| 回 | 授業内容 | 楽器ミュージアム利用の詳細 | |
|----|--------------------------|----------------|--------------------------------------|
| 8 | 楽器資料について⑥ 日本の楽器 | 楽器ミュージアムより資料借用 | 三線、三味線、大正琴 |
| 9 | 楽器資料について⑦ 民族楽器（アジア） | 楽器ミュージアムより資料借用 | 竹筒琴、鼻笛、バリンビン、カンドゥン、グングル、 ウッド、平家琵琶 |
| 10 | 楽器資料について⑧ 民族楽器（アジア以外） | 楽器ミュージアムより資料借用 | ハーディ・ガーディ、 アフリカの太鼓、 チャランゴ |
| 11 | 楽器を通して見えるもの | 楽器ミュージアムで授業 | |

昨年まで行われていたオンライン授業では、学生の理解を把握するため、また、授業の集中力を維持することを目的として、授業の最後に「授業確認プリント」を不定期で実施し、平常点に換算してきたが、学生の授業理解の把握に有効であったことから、対面授業となった今年度も、これを継続することとした。(脇谷)

授業内容

| | 授業内容〔後期〕 |
|----|------------------------------------|
| 1 | 資料保存の意義と歴史（脇谷） |
| 2 | 保存環境①（空気環境）（脇谷） |
| 3 | 保存環境②（生物被害と IPM ①）（脇谷） |
| 4 | 保存環境③（生物被害と IPM ②）（脇谷） |
| 5 | 素材別保存環境・歴史的楽器の保存と活用（脇谷） |
| 6 | 資料の取り扱い・梱包と輸送（脇谷） |
| 7 | 弦楽器の保管と修理（守重） |
| 8 | 管楽器の保管と修理（守重） |
| 9 | 打楽器の保管と修理（守重） |
| 10 | 楽器の装飾等について①（ニス・漆）（守重） |
| 11 | 楽器の装飾等について②（彫金）（守重） |
| 12 | 楽器の装飾等について③（蒔絵）（守重） |
| 13 | 課題発表とその考察・質疑応答①（守重・脇谷） |
| 14 | 課題発表とその考察・質疑応答②（守重・脇谷） |
| 15 | 課題発表とその考察・質疑応答③・全発表のフィードバック（守重・脇谷） |

前期の「博物館資料論」に引き続き「博物館資料保存論」も対面形式での実施となった。資料は授業開始時に各自に配付し、パワポを使用し資料の内容を講義した。第7回目～第9回目は各楽器類の手入れと保管、主な修理について、第10回目～第12回目は楽器に施される装飾の技法、保管について、ともに講義形式で授業を進めた。昨年度のハイブリッドの授業形式では得られなかった学生とのコンタクトがとれ、改めて対面での授業による教育効果を実感することができた。（守重）

今年度の「博物館資料保存論」が対面形式になったことによる昨年との大きな変更点としては、オンライン、あるいはハイブリッド形式の授業では実施できなかった項目（第6回目「資料の取扱い」）が、数年ぶりに実物資料を用いて、実施することができたとい

う点である。しかし、コロナ禍前と全く同様の方法で行うわけにはいかず、コロナと共存するアフターコロナとしての方法が必要であった。

コロナ禍前は、和室に一堂に会し、全員で資料の取扱いの体験を行っていた。しかし、今は「3密」を避けて実施する必要があるため、和室よりも広い教室で、班に分かれて、少人数で順番に実施することとした。また、手の消毒も入室時とは別に行った。このように、コロナ禍前に比べると不便なこともあるが、掛け軸の扱いや箱やひもの扱いなど、資料の取扱いは、机上の知識だけでは習得が難しいため、実物資料を用いた学びは、対面授業の大きな利点であることを改めて感じた。(脇谷)

授業内容

| | 授業内容〔後期〕 |
|----|-----------------|
| 1 | 博物館教育とは |
| 2 | 博物館における教育活動の諸形態 |
| 3 | 博物館教育の歴史 |
| 4 | つながるミュージアム |
| 5 | 音楽系博物館の教育活動 |
| 6 | ユニバーサル・ミュージアム |
| 7 | 子ども向けプログラム立案 |
| 8 | 子ども向けプログラム製作 |
| 9 | 子ども向けプログラム中間発表 |
| 10 | 子ども向けプログラム仕上げ |
| 11 | 子ども向けプログラム発表 |
| 12 | 教育プログラム発表・質疑応答① |
| 13 | 教育プログラム発表・質疑応答② |
| 14 | 教育プログラム発表・質疑応答③ |
| 15 | 発表のフィードバック及び総括 |

今年度より、全面的に対面形式の授業となった。「博物館教育論」では、「何をどのように伝えたら、相手にわかりやすいか。また、より興味を深めてもらえるか」という、「企画力」や「伝える力（プレゼンテーション能力）」を養うことを目標としている科目である。学生にとってこれらのスキルは、学芸員に限らず、広く社会の中で求められる要素でもあるため、是非高めておきたいところである。実際、博物館業界においても、ユニバーサルな視点や生涯学習の視点などから、近年、博物館における教育活動の重要性は、ますます高まっているといえる。

このため、授業の前半6回は、博物館教育に関わる基礎的な知識を習得する座学形式の〔基礎編〕と、各自がテーマに基づいて企画・製作・発表を行う〔実践編〕で構成されている。幸い、今年度は、授業が対面形式となり、かつ、楽器ミュージアムが公開さ

れたため、楽器ミュージアムの資料を実際に用いながら、班ごとに、子ども向けの教育プログラムを立案し、それをよく練り、その後製作し発表することができた〔写真1〕〔写真2〕〔写真3〕。

博物館での学びは、一般に、実物資料に即した学びとも言われるが、今年度は、対面授業と博物館公開が実現したことで、双方の良さを享受した本来の学びをようやく行うことができた。

学生からは、子どもを対象とした（対象年齢に沿った）プログラムのテーマ設定や企画する難しさを感じたという声が聞かれた一方、人前でわかりやすく伝えるための工夫が、各班で感じられた。さらに、発表者以外の学生たちは、子どもの視点に立ち「プログラムの受講者」となったが、積極的に発表に関わる姿がみられた。中には、グラスハープをテーマとした班があったため、「プログラムの受講者」に扮した学生たちは、教育プログラムの中でグラスハープを興味深そうに体験していた。



〔写真1〕

子ども向けプログラムより

「さまざまな楽器を比較してみよう！」



〔写真2〕

子ども向けプログラムより

「動物や人の飾りがついた楽器をさがそう」(モチーフ・民族楽器)



〔写真3〕

子ども向けプログラムより

「グラスハープを演奏してみよう」

・授業の到達目標及びテーマ

博物館とは資料を収集、保管、展示し、教育的配慮の下に一般の利用に供し、これらの資料に関する調査研究と公開を目的とする機関である。実際の博物館での実習、および合同で展覧会を企画することを通じ、博物館においてこの営みがどのように行われているのかを知ること、博物館資料を扱うための基本的方法を身につけることを目標とする。

・授業の概要

学内での講義と武蔵野音楽大学楽器博物館またはその他の博物館等で、博物館の営みに関する体験実習、展覧会の調査を行う。また、その環境、組織、展示活動への知見を深めるかたわらで、その博物館（および他の博物館）の展覧会・講習会などの行事に、学芸員の立場と一般利用者の立場を同時に意識し参加する。

・授業内容〔前期〕

- 1 博物館実習の目的
- 2 博物館・美術館の現状①：日本の博物館
- 3 博物館・美術館の現状②：日本の美術館
- 4 博物館・美術館の現状③：世界の博物館・美術館
- 5 博物館資料の取り扱い方①：美術資料
- 6 博物館資料の取り扱い方②：図書資料
- 7 博物館資料の取り扱い方③：工芸資料
- 8 博物館資料の調査方法① 楽器資料を調べる①
- 9 博物館資料の調査方法② 楽器資料を調べる②
- 10 博物館資料の調査方法③ 楽器資料を調べる③
- 11 博物館資料の調査方法④ 楽器資料を調べる④
- 12 博物館資料の調査方法⑤ 楽器資料を調べる⑤
- 13 展覧会企画・実施実務研究①
- 14 展覧会企画・実施実務研究②
- 15 展覧会企画・実施実務研究③／博物館館務実習事前指導

・授業内容〔後期〕

- 1 展覧会企画・実施実務研究④
- 2 展覧会企画・実施実務研究⑤
- 3 展覧会企画・実施実務研究⑥
- 4 博物館館務実習事後指導
- 5 企画展示に伴う諸手続きを知る①：企画制作
- 6 企画展示に伴う諸手続きを知る②：展示プランの検討
- 7 企画展示に伴う諸手続きを知る③：資料制作
- 8 企画展示に伴う諸手続きを知る④：印刷物制作・宣伝広報
- 9 企画展示に伴う諸手続きを知る⑤：輸送展示撤去の実際
- 10 課題発表：オリジナルの展示企画制作①
- 11 課題発表：オリジナルの展示企画制作②
- 12 課題発表：オリジナルの展示企画制作③
- 13 課題発表：オリジナルの展示企画制作④
- 14 課題発表：オリジナルの展示企画制作⑤
- 15 総括：博物館の外観と内観について

今年度は、前年度に続き新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、ほぼ全てZoomを用いたりモート講義となった。

2020年以降新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から行われた世界的規模のロックダウンに伴い、美術館や博物館やホールなどの休館が相次いだ。しかしその時期を経ることによってそれらの施設の情報化と発信方法の変更が大きく行われたのも事実である。このような背景を踏まえた増えで国内外の美術館、博物館、ホールの調査を課題とし、発表を行った。

本年度は、すべての学生が楽器ミュージアムにて実習を受講した。その中で実際の展示実習を行うため、本講義においては楽器ミュージアム協力のもと、架空の展覧会「架空の楽器展2022」をWEB上で行った。4つのグループに分かれ、「戦場から聴こえる音楽」「あやしい楽器展」「楽器で語るダークで切ないギリシャ神話」「ART×INSTRUMENT～絵画から奏てられる音楽～」という4つのテーマで展示を企画し、それぞれカタログを作成し公開した。 (久保)

架空の楽器展 2022HP

<https://musashinoondai.wixsite.com/website-2>



TOP



展覧会について



戦場から聴こえる音楽



あやしい楽器展



楽器で語るダークで切ないギリシャ神話



ART X INSTRUMENT ~絵画から奏でられる音楽~

カタログ

■戦場から聴こえる音楽

企画：五十嵐まりも、岡村瑠那、小林彩紀、本田悠



ご挨拶

今も昔も、戦争は世界各地で起きます。一見、戦争と音楽はかけ離れたものですが、愛国心の育成や士気高揚を理由に、音楽がツールとして用いられたことが多々ありました。

本展示は、ヨーロッパ、とりわけトルコとイギリスの軍楽隊の楽器、日本とフランスの軍楽と能の展示を行います。本展示を通して、戦争が音楽に与えた影響を考えていただけたら幸いです。

それでは、まずは軍楽隊について見ていきましょう。

1. 軍楽隊

—トルコとイギリスの軍楽隊—

軍楽隊とは、軍隊に属する音楽隊のことで、今では行進隊の前身である。発足した当初は、合奏や行進など軍務を動かすために結成された。現在は、国家行事などで音楽を演奏することも。

本展では、トルコとイギリスの軍楽隊の歴史を紹介するとともに、イギリスの軍楽隊で使用されていた楽器を展示する。

(1) トルコとイギリスの軍楽隊の歴史

12世紀～14世紀
トルコの軍楽隊で、水鼓や大鼓、タンバム、トライアングルが使われるようになる。

17世紀～19世紀
トルコの影響を受けイギリスがフランスで、ショームやシャム（ホルン）を採り入れたことがきっかけとなる。イギリスでは、宮廷の軍楽隊がフーバーバル（Henry Purcell (1659-1695)）などによる作品を演奏した。

① セルバン Serpant

セルバンはフランス語で「蛇」を意味し、その名の通り蛇を連想させるようなS字の形状をしている。16世紀の終わりごろにドド・リョーム（Jean Guilloume (1540-1600)）が発明したとされ、フランスでは宮廷で採用して、教会音楽や室内楽で幅広く使用された。18世紀中期になると、セルバンのイギリス版として宮廷の管楽器の補助として普及した。また、オーストラリアでも使用され、ジャズやブルースの楽器として（1813-1901）のイギリス版の「ウィリアム・ウィリアムズ（William Richard Wagner (1813-1883)）」などの使用例がある。ただ、このセルバンの原型はトルコにあり、トルコでは「ジャズ・バズン（Jazz Basson russe）」などと呼ばれた。

20世紀

1908年になると、イギリスは国立音楽学校を設立した。ちなみに音楽家のオーストラリア人 Gustav Holst (1874-1934) は、1909年から1911年にかけて「牧歌的なための管楽器演奏法」として（牧歌的なための管楽器演奏法）をイギリスの軍楽隊のために作曲した。作曲家でありながらイギリスの音楽家として知られる。また、作曲家のジョージ・グレンツ（George Gershwin (1898-1937)）も、軍楽隊のために「ジャズ・バズン（Jazz Basson russe）」を考案した。1913年には、ウェリントン・バンドが結成された。1917年には、ウェリントン・バンド（ウェリントン・バンド）が結成された。このバンドは、トルコやフランスの楽器も取り入れた。

(2) 軍楽隊の楽器

① ショーム Shalm

ショームは、13世紀から17世紀のヨーロッパで用いられていた、ダブルリードの管楽器である。現在のオーボエの前身で、宮廷の祝賀の儀式などで演奏の役割などに用いられていた。

ショームの祖先は、13世紀頃に十字軍の戦利品としてヨーロッパに持ち込まれたイスラムの楽器「ザマ（Zama）」である。これは音色が良かったため、戦を鼓舞する効果があったため、当時のヨーロッパの人々には特異な楽器であった。

制作年：1975年
制作地：ドイツ
制作者：Moesel Verlag
（全長約5.5m、胴体外径3.55m、内径1.2m、足径9.76m）

② バグパイプ Bagpipe

3本のドラム管（パイプ）を管楽器（バッグ）に繋ぎ、膨めた空気を押出すことでリードを振動させて音を出す楽器の総称である。バグパイプにはいくつ種類がある。一般に、日本でも知られているのは「グレート・ハイランド・バグパイプ Great Highland Bagpipe」である。

バグパイプと単に呼ばれるときは、ほとんどこれを指している。バグパイプの発祥は不明で、インドやアフリカや南アジアにも似た楽器がある（守屋2015,194）もある。

制作年：不詳
制作地：スコットランド
制作者：R. Lowrie
（全長約5.5m、胴体径3.55m、内径1.2m、足径9.76m）

③ セルバン Serpant

セルバンはフランス語で「蛇」を意味し、その名の通り蛇を連想させるようなS字の形状をしている。16世紀の終わりごろにドド・リョーム（Jean Guilloume (1540-1600)）が発明したとされ、フランスでは宮廷で採用して、教会音楽や室内楽で幅広く使用された。18世紀中期になると、セルバンのイギリス版として宮廷の管楽器の補助として普及した。また、オーストラリアでも使用され、ジャズやブルースの楽器として（1813-1901）のイギリス版の「ウィリアム・ウィリアムズ（William Richard Wagner (1813-1883)）」などの使用例がある。ただ、このセルバンの原型はトルコにあり、トルコでは「ジャズ・バズン（Jazz Basson russe）」などと呼ばれた。

制作年：1810年
制作地：フランス
制作者：J. Besson Key
（全長73.5cm、筒径237mm、ベル直径10cm）

2. 軍歌

軍歌とは、軍隊の士気を鼓舞し、愛国心をふるいたせるために作られた歌のこと。ここでは、日本における軍歌の歴史と、フランス国歌（ラ・マルセイユーズ）を例に世界の軍歌の歴史を紹介する。歌によって人々の心が高揚し、戦時下における愛国心に繋がったことを伝えたい。

(1) 日本における「軍歌」

軍歌というジャンルが明確に成立したのは、明治期であるといわれている。それまでも軍歌的な歌が存在することはあった。万葉集には数々の軍歌に関する歌、愛国にかかわる歌が多数存在する。例えば、歴史に合せて詠まれた《平家物語》も戦歌と見られるだろう。しかし、それが軍歌と呼ばれることはなかった。

① 《宮さん》

日本の軍歌には《宮さん》（《宮さん宮さん》、《トコトコヤン》）が挙げられる。以下は歌詞から始まる戦時歌の様子を見たものである。しかし、これは当時「軍歌」として認識されていなかった。

宮さん宮さん舞の舞に
ひらひらする羽衣を
トコトコヤンヤンヤン

ありや朝敵征伐せよとの
歌の舞にやほらな
トコトコヤンヤンヤン

（歌謡スキャン：岡村瑠那）

② 《抜刀隊》

西南戦争も終ったので、フランスの（ラ・マルセイユーズ）やドイツの（ラインの守り）の歌に倣って作られた。官軍の活躍を讃え、士気を鼓舞するフランスの（ラ・マルセイユーズ）（Louis Adolphe Edouard Lemaire (1818-1918)）により詠まれた。1858年に発表された。以下に、歌詞の一部を転載したものと楽譜を引用する。

我は官軍義勇は、天地を渡る朝敵を
絶つ大君たる者は、古今無双の英雄を
此にたてしは、共に御存死の勇士
鬼神に恥ぢるも、天の許さぬ反逆を
絶つては、君は君より、敵は我らにぞぞ
敵の心ぶらば、進めや進め、勇に
主敵の朝敵を連れて、死ぬる覚悟を述べし
（一節転載）

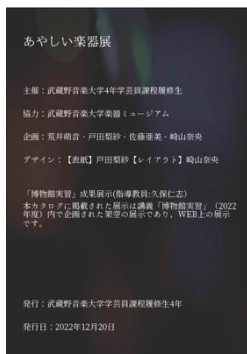
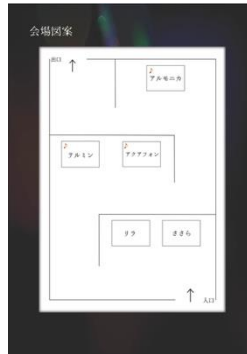
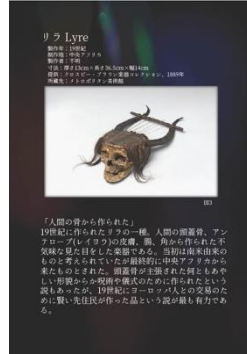
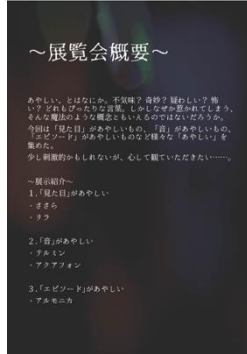
③ 《ラ・マルセイユーズ》

フランスの国歌であるラ・マルセイユーズの楽譜と歌詞の一部を示す。

（歌謡スキャン：岡村瑠那）

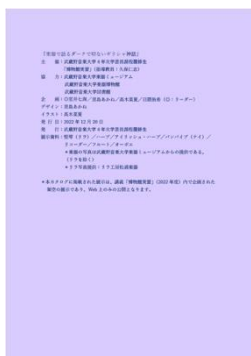
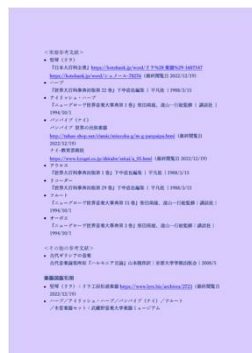
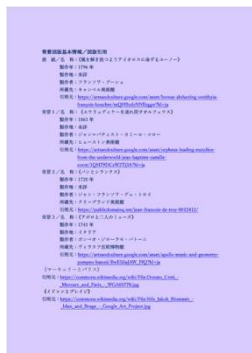
■あやしい楽器展

企画：荒井萌音、戸田梨紗、佐藤亜美、崎山奈央



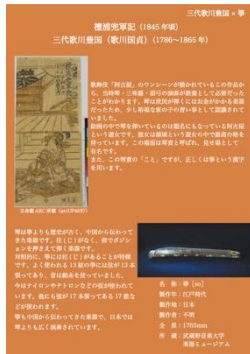
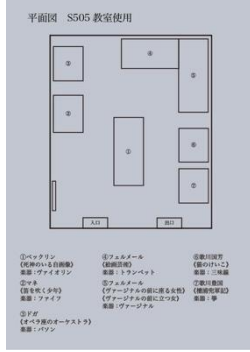
■楽器で語るダークで切ないギリシャ神話

企画：室井七海、黒島あかね、高木菜夏、日隈侑希



■ART × INSTRUMENT ~絵画から奏てられる音楽~

企画：小出佳音、高田理海、古谷一乃、中村佑成



〈本学楽器ミュージアムにおける博物館実習の実施状況報告〉

実習生人数 人数 16名

場所 武蔵野音楽大学楽器ミュージアム、記念室、パルナソス多摩楽器展示室、
入間キャンパス収蔵庫 ほか

担当 守重信郎、脇谷真弓、須藤麻紀子

2022年度博物館実習スケジュール

グループ① 8月29日（月）～9月2日（金）

A班 佐藤・戸田・本田・崎山・古谷

B班 室井・日隈・五十嵐・高田

| | 日時 | 実習内容 | | |
|---|-------------|------|--|------------------------------------|
| 1 | 8/29 (月) | 班別実習 | 江古田記念室/楽器ミュージアム 「概要説明」「文献調査」 「企画展（多摩キャンパス）について」 「企画展準備」 | 全員 江古田記念室 「記念室資料整理」「記念室展示検討」 |
| 2 | 8/30 (火) | 班別実習 | 入間キャンパス収蔵庫 「収蔵庫棚整備」 「楽器点検」 | 全員 入間キャンパス収蔵庫 「楽器点検」 |
| 3 | 8/31 (水) | 班別実習 | 江古田記念室/楽器ミュージアム 「写真撮影」 「資料の受入業務」「楽器点検」 | |
| 4 | 9/1 (木) | 班別実習 | パルナソス多摩 「平ケース清掃・展示・前回展示資料の搬出・展示ケース清掃・常設展示」 在宅実習（文献調査） | |
| 5 | 9/2 (金) | 全員 | 江古田楽器ミュージアム 「パネル文章作成」 「パネル作成」 「楽器点検・展示室清掃」 | |

グループ② 9月5日(月)～9月9日(金)

A班 中村・荒井・小出

B班 高木・小林・黒島・岡村

| 日時 | | 実習内容 | | | |
|----|------------|------|---|----|---------------------------------|
| 1 | 9/5 (月) | 班別実習 | 江古田記念室/楽器ミュージアム 「概要説明」「文献調査」 「企画展(多摩キャンパス)について」 「資料受入業務」 | 全員 | 江古田記念室 「記念室資料移動」 |
| 2 | 9/6 (火) | 班別実習 | 入間キャンパス収蔵庫 「収蔵庫棚整備」 「楽器点検」 | 全員 | 入間キャンパス収蔵庫 「ピアノワックスがけ」「楽器点検」 |
| 3 | 9/7 (水) | 班別実習 | 江古田記念室/楽器ミュージアム 「写真撮影」 「資料の計測」「楽器点検」 | | |
| 4 | 9/8 (木) | 班別実習 | パルナソス多摩 「開梱・展示・展示仕上げ」 在宅実習(文献調査) | | |
| 5 | 9/9 (金) | 全員 | 江古田楽器ミュージアム 「パネル文章作成」 「パネル作成」 「楽器点検・展示室清掃」 | | |

コロナ禍三年目となった今年も、対策をとりながら対面で実施することができた。今年度は実施期間を2期設け、密が予想される活動については、2班編成で実施した。幸い、この三年間、学芸員実習期間に新型コロナウイルス感染症の罹患者は発生していない。

今年度は楽器ミュージアムが完成し、リニューアルオープン後初の学芸員実習であった。昨年度の学芸員実習では、展示の仕上げやキャプションづくりなど、実習生にとっては、ミュージアムづくりの終盤を肌で感じる貴重な機会となったが、今年度は、公開

後初の実習となり、資料の点検や館内の清掃など、博物館の維持には不可欠で、IPMにも関わる実務を体験することができた〔写真1〕〔写真2〕。また、学芸員実習前に、新着資料がまとまって入手されていたため、実際に、これらの新着資料の計測や受入業務を行うことができた〔写真3〕。

このほか、人間キャンパス収蔵庫では、収蔵棚や資料の整理、楽器点検など、保存・管理に関する内容を行った。パルナソス多摩では、企画展示及び展示替えの流れを実習生たちに体験してもらいたいことから、毎年、実習期間に展示替えを行うようにしている。まず、企画展についての一連の流れを座学で学び、その後、展示の一部については、実習生たち自ら資料選定やレイアウト検討を行い〔写真4〕、現地で展示を完成させていった〔写真5〕〔写真6〕。展示替え作業は、実習の2週に合計8班で行われるが、展示替えの前半・後半で、作業内容は自ずと異なるものとなる。しかし、全員がたとえ少しであっても展示のレイアウト検討及び展示体験ができるよう配慮した。

さらに、楽器ミュージアムでは、現在、学園記念室開設プロジェクトを推進しており、令和6年度開室に向けて準備を進めている。このため、開室に向け大型資料の移動や資料整理など、体を使う作業なども行った。

最終日は、実習中に各自が設定した楽器について、実習中に文献調査を行い、パネル解説を作成した。

実習を終えた学生からは、学芸員が担う業務の幅広さに驚いたという声や、歴史的な楽器という文化財に直接触れるという貴重な経験から、学芸員という仕事に興味が深まったなどという声がきかれた。

〔写真1〕

江古田楽器ミュージアムにて楽器ミュージアムが公開されたため、久しぶりに「展示室清掃」や「展示資料の楽器点検」が実習項目として復活した。





〔写真2〕
江古田楽器ミュージアムにて

〔写真3〕 江古田記念室にて
楽器ミュージアム新着資料の
受入業務



〔写真4〕 江古田記念室にて
パルナソス多摩の企画展示の一部について、
実習生自身が資料選定、レイアウトを検討した。



〔写真5〕



〔写真6〕

パルナソス多摩にて

各班で展示大ケース1つ展示した。形状や大きさ、重さが多様な楽器をどのように展示したら、安全で美しくわかりやすい展示となるのか、実習生たちは苦戦していたが、数時間後、展示が完成したときには、自分たちの展示に愛着心と各班に結束力が生まれ、自然に集合写真を撮っていた。

編集・発行：武蔵野音楽大学 音楽学部 音楽総合学科
アートマネジメントコース

発行日：2023年4月1日

